

自序

本書は、筆者が近年発表した東アジアの文化交流に関する論稿八編を集めて一冊にまとめたもので、「理論編」「中日交流編」及び「台日交流編」の三つの部分から構成されている。これら八編の論稿は、もと中国語で執筆したものであるが、台湾師範大学東アジア学科の藤井倫明副教授、立教大学の水口幹記助教の助力を得て日本語に翻訳し、ここに一冊の著作として出版する運びとなった。心より感謝申し上げたい。東アジアの文化交流について卑見を述べた本書を公にすることで、多くの方々に読んでいただき、ご意見、ご批判を賜ることができれば幸いである。

人類の歴史が、西暦二〇〇〇年を超過した今、グローバル化とアジアの勃興という二つの顕著な趨勢が見られる。この二大趨勢の下、人文社会科学研究は単一の国家を視野に据える伝統的な研究の枠組みから、異なる境界、異なる国に跨る、多くの主体が奏でるさまざまな音が響きあうような新研究の方向に向かいつつある。東アジア文化交流研究は、まさにこのような新たな趨勢の下で、新たな研究領域として注目をあびるようになっていく。

だが、ここで我々が先ず考えなければならないのは、「東アジアとはいったい何か」という問題である。山室信一氏によれば、「東アジア」とは地理学的な意味での「与えられるアジア」である

のみではなく、実際には、より文化史的意義での「創られるアジア」である(山室信一「思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企」東京・岩波書店、二〇〇一年、一一七頁)。悠久なる歴史の流れの中で、東アジア各国の人民、知識人、官僚、商人たちは、各国の間を行き交い、国境を越えた交流を繰り返してきた。「東アジア」という名詞の定義あるいは内容は、まさにこのような形で頻繁に繰り返り広げられていく実際の交流の中で、そのつど定義し直され、新たな内容が生み出されていく、そのようなものである。

このように「東アジア」とは、不断に創造を繰り返すという過程の中に位置づけられる存在であるため、それは中国、日本、韓国、ベトナムといった個々の国の上に構築されている抽象的概念と見なされるべきではなく、東アジア各国の具体的かつ特殊な相互交流の過程の中で、時とともに進展していく存在と見なされるべきである。我々は「東アジア」に対する視点を、「の上」から「の中」へと転換することで、「東アジア」はひとつの硬直した、変化することのないイデオロギーとしてではなく、各国の人物が実際に行き交い、文化交流を繰り返す中で、形成され、創造され、時代に応じて変化していく文化圏として捉えられることとなる。このような地域史研究領域としての東アジア文化交流圏において、各国の人物の往来、政治的な影響の及ぼし合い、思想文化上の交流などは、往々にして感性的な要素が理性的な成分を大きく上回るものとなる。例えば、西暦一六四四年明王朝は滅亡し、それに替わって清王朝が東アジアの歴史の地平に立ち現れることとなったが、このような歴史上の巨大な変化は、こうそうぎ黄宗羲(一六一〇—一六九五)にとつての「天崩地解」、ある

いは顧炎武（一六一三—一六八二）にとつての「亡天下」であるだけでなく、中国周辺諸国の知識人にも、とてつもなく大きな心理的衝撃をもたらし、山崎闇斎（一六一八—一六八二）は、門人に対して次のような仮説的な問題を提起している。もし中国が、孔子を大将、孟子を副将として「数万騎を率いて来たり、我が邦を攻むれば、則ち吾が党の孔孟の道を学ぶ者、之れを如何せん」。山崎闇斎の提起した問いは、東アジア各国の相互関係の中で「文化的アイデンティティー」と「政治的アイデンティティー」との葛藤という問題に触れるものであり、このような問題意識は、朝鮮の知識人の中にも鮮明な形で表れている。朝鮮の多くの知識人は、明王朝が滅亡した後も、依然として「崇禎」という明朝の年号を使い続けており、東アジアの交流史が一つの血と涙、愛と恨みを伴った生々しい具体的な歴史経験であることを露呈している。

血と涙、躍動する情感に満ちあふれた実際の東アジア文化交流史においては、文化的アイデンティティーこそが最も鍵となる位置に存在していた。一八、一九世紀のベトナムの官僚、或いは知識人は、中国に赴くと、中国の士大夫らと詩の応酬をしたが、彼らが共有し、分かち合っていたものは、漢字文化圏中の文化的アイデンティティーと中華文化に対する感情であった。一七世紀、日本に亡命した浙江余姚出身の朱舜水（一六〇〇—一六八二）が、安東省庵（一六二一—一七〇一）に送った書信から、彼が亡命先の日本で、いかに苦難の生活を送っていたかを知ることができるが、彼がそのような流離の苦しみの中でも「天日は再び明らかに、沈州は復び陸となる」（『朱舜水集』二、北京・中華書局、一九八〇年、一四頁）という信念を堅持したのは、まさしく中華文化に対するアイデンティ

ティーと感情的な思い入れによるものであった。一八九五年、日本が台湾を占拠した後、当時台湾一の富豪であった李春生（二八三八―一九二四）は、日本当局の招きに応じて日本を訪れ、浅草で日中海戦の劇を観賞したが、劇中、清朝が惨敗する一幕に際しては、袖で目を覆って見るに忍びず、「新恩は厚しと雖も、旧義は忘れ難し」と嘆息したとのことであるが、このような民族的感慨が、まさしく文化的アイデンティティーの基礎の上に構築されているのである。朝鮮時代の燕行使は、中国において、中国の知識人と筆談によって、陽明学は正統か異端かというテーマについて論争を展開したが、これもまた文化的アイデンティティーの一つの表現であろう。朝鮮の朱子学の大家丁若鏞（茶山、二七六二―一八三六）は、荻生徂徠（二六六一―一七二八）と太宰春台（一六八〇―一七四七）の著作を読み、日本は礼儀の国なので、決して朝鮮を侵略することはないだろうと考えた。このような丁茶山の日韓関係に対する楽観的な判断もまた、「文化的アイデンティティー」によるものであり、「政治的アイデンティティー」や経済的利益に基づいた思考ではない。

二二世紀の日本と台湾の関係はきわめて密接なものであり、二〇一一年に台湾を訪れた日本人観光客の総数は一三〇万人にもものぼり、二〇一〇年に比べて二〇パーセントも増えている。二〇二一年一月から三月にかけて日本を訪れた台湾人の総数は三二万人に達し、二〇一一年の同時期に比べ九六パーセントもの増加が見られる。二〇一一年に発生した東日本大震災に対する義捐金の額は、台湾が世界第一位とのことである。この新たな時代において、東アジア各国が頻繁に交流を展開することで、各国の人民の間に日本語の所謂「絆」という感情が構築され、そのような中で、我々は

より一層、地域史としての東アジア交流史を振り返り、学び直していくことが可能となるであろう。そしてそこから奥深い歴史の知恵を汲み取ることができるようではないだろうか。

二〇二二年秋
台大人文社会高等研究院において